

縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退(5)

武田 宗久

V 現東京湾東岸地域の貝塚分布(別表・付図20・21参照)

南 半 部

(5) 堺川沿岸

袖ヶ浦市西部の台地標高30m余の清水頭に源を発し、西方に流れて奈良輪地区の海食崖を降り東京湾に注ぐ堺川が開析した谷津の支谷の縁辺に大野台・台中・西浜街道の諸貝塚があるとされているが(註1)、いずれも規模・成立の時期等は不明であり、かつ古墳時代の遺物も採集されることから、今後検討すべき余地があると思われる。

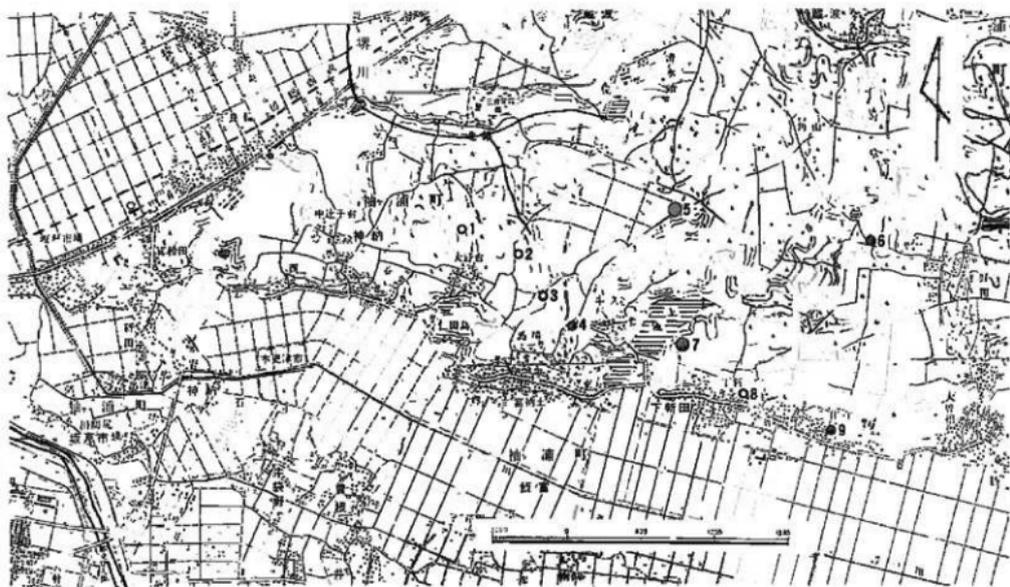
(6) 小櫃川沿岸

小櫃川は延長88km、安房郡清澄山系元清澄に源を発し、君津市東部の峡谷を北流し、同市龜山付近から川幅を次第に広め、著しく蛇行しながら河岸段丘を発達させて勾配の緩やかな平野をつくる。木更津市百目木付近から流れを西方に転じ、広大な河成平野を展開し、氾濫原特有の微底地(旧河道)・自然堤防・砂州等が見られる。最下流は木更津市高柳～袖ヶ浦市坂戸市場地先で扇状三角洲を形成して東京湾に注ぐ。縄文時代の貝塚はこの下流に面する兩岸台地の縁辺に散在するが、調査はまだまだ充分とはいえない。

A 小櫃川右岸

現在貝塚として報告されているのは、袖ヶ浦市の飯富・山野・下野田・宮ノ越・大宮台・二ツつの6遺跡である。このうち飯富・山野・下野田・宮ノ越は小櫃川の旧支流浮戸川(註2)に向って開口する谷の周辺台地に所在する。この谷は北から南の開口部に向かうものと、東北から開口部に向うものに大別されるが、飯富は北谷の開口部にある下池に面する標高約30mの緩傾斜地にある地点貝塚で、堀之内・加曾利B・安行I式を主とし、加曾利E・安行II式も含む。

山野は北谷奥の貝塚で、標高35.85m～39.75mに立地する半円形の馬蹄形貝塚である。昭和48年東京電力の送電铁塔建設に伴う発掘調査によれば、貝塚は2つの大きな貝層が東西120m、南北約80mの範囲に広がる八字形を呈する。発掘は東側貝層の一部と貝層を含まない部分を加えた30㎡で行なわれ、堀之内I・II・加曾利B・曾谷・安行I・II・安行III a・姥山II・大洞式を出土し、遺物の中にオオツクノハ製貝輪(完形品)1ヶがあった(註3)。金子浩昌



1.大野台 2.台中 3.西浜街道 4.坂富 5.山野 6.下野田 7.高ノ越 8.大宮台 9.ッ作

第1図 堺川・小櫃川右岸の貝塚分布図



1.飯釜 2.山野 3.宮ノ越 4.大宮台 5.下野田 6.三ツ作

第2図 山野・宮ノ越貝塚を中心とした貝塚群

によると「貝層は40~80cmに達する混土貝層あるいは混貝土層が堆積し、部分的に純貝層が発達した。貝層は堀之内I式土器を主体とする混貝土層がひろく堆積するが、貝層部分の外側に加曾利B・安行I・II期の貝ブロックがあり、そこではかなり多い獣骨の山土をみた」という(註4)。貝類はイボキサゴ・ハマグリが多く、その他アサリ・ツメタガイ・サルボウ・アカガイ・シオフキ・マテガイ・オオノガイ・アカニシ・ウミナ・マガキ・バイ・カガミガイ・イタボガキ・テングニシなど潮間帯に棲む純鹹性のものが大部分である。鳥獣類はカモ・キジ・ハト・オオハム・ヒシクイ・カラス・タカ・スズメ・カイツブリ・アホウドリ・ウミガメ・タヌキ・ムササビ・サル・ニホンオオカミ・イノシシ・シカ・クジラ・イルカ・イヌ・テン・イタチ・ネズミ・カワウソ、魚類はサメ・エイ・マイワシ・ボラ・マアジ・ブリ・クロダイ・マダイ・コチ・コショウダイ・フグ・ヒラメ・カレイ・マダロ・サワラ等が検出された。

次に東北谷では谷奥に近く下野田があるが、内容は不明である(註5)。宮ノ越は開口部の

上池に面する標高30m未満の台地にある馬蹄形貝塚で、東西50m南北70mを測り北方に開口する。昭和62年の区画整理事業の際に発見され、少数の阿玉台、勝坂、曾谷式と多数の加曾利EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・称名寺Ⅱ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曾利BⅠ・Ⅲ式土器とイボキサゴ・ツメタガイ・ハマグリ・アサリ・カガミガイ・シオフキ・サルボウ・イタボガキ・バイ・アカニシと汽水系のヤマトシジミが採集されたという(註6)。

大宮台・三ツ作は浮戸川に面する河成段丘上に所在するが、大宮台については遺物の散布が薄く、性格は不明である。三ツ作は昭和20年代に高橋俊夫が村道工事の土砂取りのため貝塚の一部が破壊されていたのを発見して遺物を採集した。標高25m前後の斜面から台上にかけての点在貝塚と推定され、茅山上層式とハイガイ・アカニシ・カガミガイ等が出土した(註7)。

B 小横川左岸

木更津市の西北部にある氈圓台地を開析する小谷の縁辺に永井作・氈圓・江沢の3貝塚が知られる。永井作は南から北に突き出た小さな舌状台地の末端部に近接する緩やかな傾斜地において、その西側には太陽山(恋の森)の北端に発して北東に向い、永井作の北側を経て牛袋川西に至る砂州がある。昭和32年本貝塚の一部を発掘した対馬郁夫の報告によれば、標高8m前後の砂丘上に立地し、「土壌堆積の順序は褐色混土砂層に始まり、赤褐色砂土層への堆積を示すが、一部の貝層が両者の間に介在する外は、貝層上部は殆んどが地表に露出し、下部が赤褐色砂土層に接し、トレンチの全体を通じて純貝層と称すべきものは確認できなかった」という。

遺物は堀之内Ⅰ式を中心とし、同Ⅱ・加曾利BⅠ・Ⅱ式と、魚類は大型のフグ(トラフグ・コモンフグ)を最多とし、クロダイ・スズキ・マダイの類となり、サメ・クジラ・イルカなどもあり、淡水産のニゴイなど13種を数え、貝類は31種でサルボウ・アカガイ・ハマグリ・カガミガイ・シオフキが多く、イタボガキ・マガキ・オキシジミ・アサリ・ミルクイ・マテガイ・オオノガイなどがこれに次ぎ、ベンケイガイ・バカガイは少なく、ホタテガイは稀で、淡水産のカワナナ・ヒメギセル・ヒドリマキマイマイも出土した(註8)。その後、酒誌仲男の実地調査で上記土器のほか諸磯式を採集している(註9)。

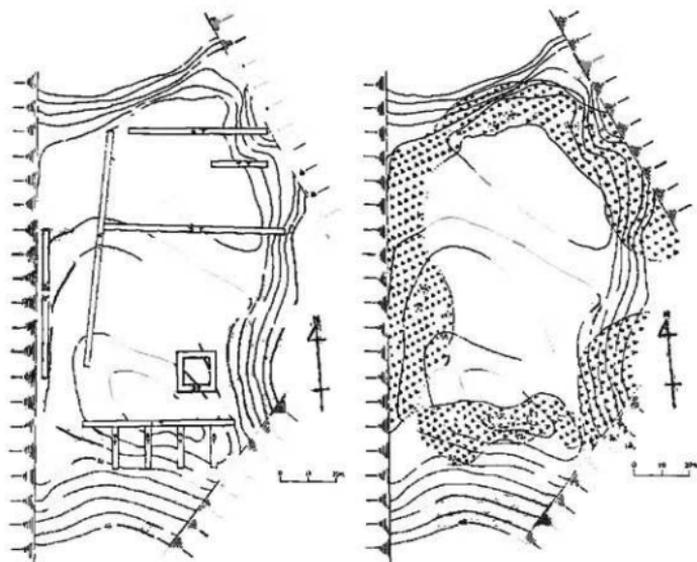
氈圓貝塚は永井作貝塚の南東方にある小谷を流れる小村川と矢那川に挟まれた氈圓台地の基部に当る一面に所在する馬蹄形貝塚で標高約60mである。昭和39年開始予定の清見台と称する広大な団地造成計画に伴う遺跡調査のため、昭和31~32年(第1次)・同44~45年(第2次)にわたる発掘が行なわれたが、全面発掘には至らず、残存部分は破壊された。規模は第1次調査以前に破壊された部分を除いて東西80m南北180mである。

本貝塚の南部に開設した数本のトレンチを中心に展開された第1次発掘の報告によれば、「貝塚の層序は概ね表土層は薄く混土貝層、そして混貝土層を経てローム層に連するが、純貝層は僅かにキザゴの一部に見られたにすぎない」とある。遺物は田Ⅰ上層式と思われる尖底部と若干の阿玉台・勝坂・安行Ⅱ式等も認められるが、主体をなすものは加曾利新・堀之内並び

に加曾利B式で、特に堀之内I・II式が主流を占めていた。

貝類はキサゴ・サザエ・アカニシ・イボニシ・ナガニシ・テングニシ・ボウシュウボラ・ウミナ・ホソウミナ・ツメタガイ・コロモガイ・バイ・アラムシロ・オオヘビガイ・チリメンカワニナ・キセルガイ・ベッコウイモ・カワニナ・ツノガイ・ベンケイガイ・アカガイ・サルボウ・ホタテガイ・イタボガキ・マガキ・マシジミ・ハマグリ・アサリ・ミルクイ・バカガイ・カガミガイ・オキシジミ・マテガイ・オオノガイ・シオフキの35種で、36箇所の貝ブロックから採集した貝の出現率は、キサゴ80.3%・ハマグリ11.5%・アサリ2.6%・シオフキ1.4%その他である。また魚類はアカエイ・ボラ・クロダイ・ヘダイ・マダイ・スズキ・マダラ・マフグ・マアジ・ドチザメ・コショウダイ・コチ・カタクチイワシ、鳥獣類はガン・カモ・ハシボソガラス・ノウサギ・カワウソ・タヌキ・イノシシ・ニホンジカ・ニホンイヌ・アナグマ・ニホンザル・イルカ・クジラ・ウミガメである(註10)。

次に第2次発掘の概報によれば、木貝塚発見の住居址は21基(第1次を含む)で、この中の1基は加曾利B式期の成人骨5体が屈葬されていたとある(註11)。また土偶は9点(破片)



第4図 紙圍貝塚の実測図とトレンチ(千葉県教育委員会作成)

で、この中の2点は晩期の所産であるという(註12)。

江沢貝塚は紙園貝塚の東北方にあり、久留里鉄道の上総清川駅の方向に、南から北に突き出した舌状台地のほぼ中程の西側に立地する地点貝塚で、加曾利E・堀之内・加曾利B・安行I式を出土したが、清見台閉地の造成によって未調査のまま全く破壊された(註13)。

註1 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年

註2 浮戸川は袖ヶ浦市下新田の低地に発し、坂戸市場で小櫃川に合流していたが、昭和28～34年にかけての奈良輪地区の海岸埋立工事(緊急食料増産計画)に伴う灌漑用水路とするために、独立人工河川として小櫃川から分離した。

註3 房総考古資料刊行会『袖ヶ浦町山野貝塚』昭和48年

註4 金子浩昌「千葉県における貝塚遺跡の分布とその性格」(千葉県文化財保護協会『千葉県貝塚』)昭和58年所載

註5 千葉県文化財センター前掲書

註6 袖ヶ浦町郷土博物館『館報』10号昭和60年・能城秀喜「袖ヶ浦町宮ノ越貝塚について」(『千葉文庫』25号)平成2年

註7 西村正衛「千葉県君津郡三ツ作貝塚発見の早期縄文式土器」(『古代』12号)昭和28年

註8 対馬郁夫「木更津市永井作新田貝塚発掘略報」昭和32年・貝塚真平・阿久津純・杉原重夫・森脇広「千葉県の低地と海岸における完新世の地形変化」(『第4紀研究』17-4)昭和54年によれば、本貝塚は低段丘上にあるとも考えられるとしている。いずれにしても台地の裾部から砂地に移る接点に立地する地点貝塚であるから、2次堆積のローム層が砂地の基盤である可能性が全く無いとは考えられない。なお本貝塚は俗称六軒町と呼ばれる遊廓の屋敷跡であった点を考慮すると、出土した魚貝類や鳥獣骨の中に当時のものが混入している可能性も否定できない。

註9 酒結仲男「日本貝塚地名表」昭和34年

註10 対馬郁夫「千葉県木更津市紙園上深作貝塚」(日本考古学協会『日本考古学年報』9)昭和36年

註11 千葉県教育委員会「紙園貝塚発掘調査概報」昭和45年

註12 山本哲也「君津地方出土の土偶」(君津都市文化財センター『研究紀要』Ⅲ)平成元年

註13 伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年

(7) 矢那川沿岸

矢那川は延長約12.5km、君津市長石字上面作標高186m付近に源を発して北西に流れ、木更

津市東太田で伊豆島川を併せ、西方に転じて木更津市街地に至り東京湾に注ぐ。この川の沿岸には伊豆島川の上流に伊豆島貝塚、矢那川本流の沿岸に徳蔵寺貝塚・明石口貝ブロック遺跡・峰ノ台貝塚・鎌足貝塚が知られている。

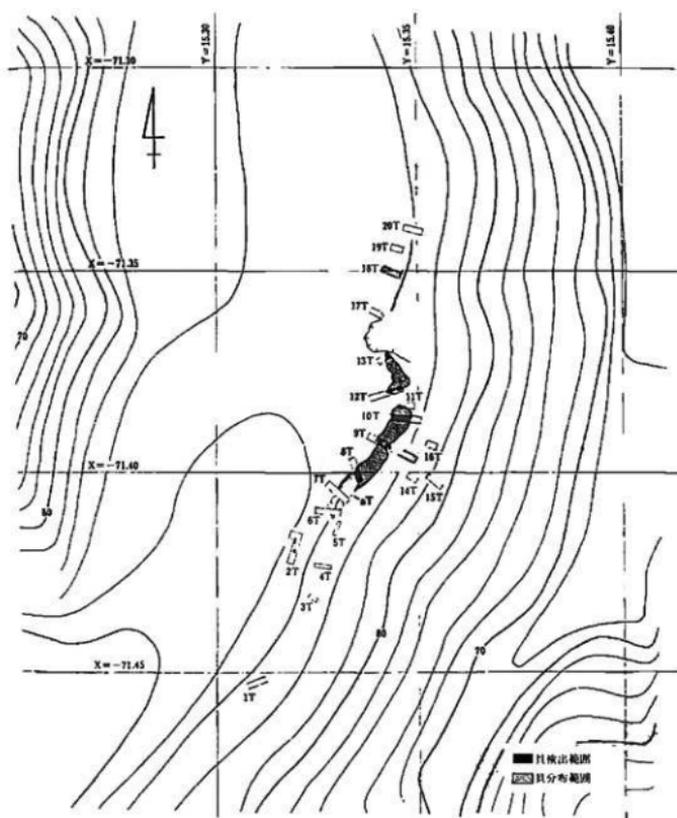
伊豆島貝塚は伊豆島川が開析する谷津の最奥部に面する西側の台地の東斜面に所在する点在貝塚で、標高86mを測り、現在の海岸線から東へ8kmの地点にある。木更津市教育委員会の限界確認のための部分的発掘調査によれば、貝層の厚さは0.8～1.0mで、局部的に掘り返された旧跡があり、覆土内より昭和24年製造の五円硬貨が出土したが、全体的には良好な保存状況を呈していた。遺物は堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曾利B式と貝類はハマグリ・アサリ・マナガイが多くウミナ・アラムシロ・イボキサゴ・バカガイ・サルボウ・カガミガイ・シオフキ・アカニシ・ツメタガイ・バイ・ミルクイなどであり、魚類はマダイ・クロダイ。鳥獣類はキジ・イヌ・アナグマ・イノシシ・ニホンジカであったという(註1)。

本貝塚の立地を地形的に観察すると、東側の谷をへだてた東方約450mのところが高標88mを示し、それより東側は鮪水川(小櫃川の支流)の開析谷となって高度が急激に低下する。つまり本貝塚は伊豆島川と鮪水川の分水嶺の近くに所在する。また本貝塚の北方には小櫃川の支流笹子川・犬成川の開析谷が樹枝状に見られる。このような環境のもとに生活した伊豆島貝塚人が主として潮間帯に生棲する上述の魚貝類を獲得し搬入するルートは、矢那川を利用するよりもむしろ前記清川を利用して小櫃川に至り、当時の海岸に達したであろうことを示唆する。

徳蔵寺貝塚は矢那川本流の上流域に所在する地点貝塚で、現海岸線から東南へ約7.5kmの地点にあり、堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曾利B式を主とし加曾利EⅡ式を含む。本貝塚の東方2.5km前後の所は標高97～108mを示し、矢那川と鮪水川上流の分水嶺となっている。従って本貝塚の魚貝類搬入ルートは矢那川よりも鮪水川経由の確率が高い。

矢那川の中流左岸にある明石口遺跡は加曾利E式期の貝ブロックを含む。峰ノ台貝塚は加曾利EⅡ・Ⅲ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曾利BⅠ・Ⅱ・Ⅲ・安行Ⅰ式期で、ハマグリ・ツメタガイ・サルボウ・ハイガイ・シオフキ・アカニシ・イボキサゴ・カガミガイ・バイを出土する中～後期の点在貝塚、鎌足貝塚は加曾利E・堀之内・加曾利B式期の地点貝塚で、いずれも標高30m前後の所にある。

註1 木更津市教育委員会『伊豆島・宮脇遺跡』平成2年・旧跡については伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年に「昭和26年9月高橋俊夫氏発掘」とあり、この時の遺物が桜井清彦・高橋竜三郎『千葉県堀之内貝塚・伊豆島貝塚・ニッ作貝塚の縄文土器』昭和58年に高橋俊夫氏採集の遺物が記載されているのが参考になるであろう。



第5図 伊豆島貝塚全体図 (1/1000) (木更津市教育委員会作成)

(8) 鳥田川沿岸

この川は木更津市の西南部の台地を開削し、桜井地区で東京湾に注ぐ。この中流左岸に面する標高20~30mの所に竝ケ作・下辻の2貝塚がある。

竝ケ作は永井作・祇園貝塚とともに明治40年代から知られた貝塚で、称名寺Ⅱ・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加善利ⅡⅡ式、ハマグリ・アサリ・イボキサゴ・ツメタガイ・サルボウ・アカガイ・シオ

フキ・アカニシ・ウミナ・イボニシ・レイシ・バイ・カガミガイ・オキアサリ・バカガイ・ホタテガイ・マガキ・イタボガキなどを出土する後期の点在貝塚である。『波岡村誌』によると「明治42年12月東京帝国大学理学部人類学教室から派遣された柴田常憲氏によって発掘、貝殻の中から布目のある無数の土器の破片・魚類の骨片・朱のついた貝殻・彫刻した鹿角を発見した」とある(註1)。また第二次大戦後、木更津航空隊基地へ駐留した米人将校H.A.Mac.Cord氏が発掘し、遺物は本国へ運ばれたと伝えている(註2)。下辻はハマグリ・ツメタガイ・サルボウ・アカニシを含む地点貝塚であるが、土器形式は判明しない。

木更津市内には上述の緒貝塚・貝ブロック遺跡のほか、縄文時代の貝塚として小浜貝塚・畑沢貝塚があるとされているが、正確な地点・規模・内容がいずれも不明であるので、後日の検討課題として本項には記載しない(註3)。

註1 田村健三『波岡村誌』昭和18年

註2 金子浩昌「千葉県君津郡天羽町富士見台貝塚」(『古代』42・43合併号)昭和39年及び木更津市『木更津市史』昭和47年等に所載

註3 千葉県教育委員会『紙園貝塚発掘調査概報』昭和45年に図示されている。

(9) 小糸川沿岸

小糸川は安房郡清澄山系の北側に源を発し、峡谷の間を北流して君津市正木に至り、北西に転じつつ河幅を広め、同市塚原付近から西北に向を変え、著しく蛇行しながら富津市大堀に達し、尖状三角州をつくって東京湾に注ぐ、延長約80kmである。この川の沿岸に分布する縄文時代の遺跡の中で、明確に貝塚と認められるものは、現在のところ二直貝塚と鹿島貝塚があるにすぎず、今後の調査が期待される。

二直は小糸川の中流右岸に面する台地の急斜面に所在する点在貝塚で標高約90m。後述する鹿島とともに明治30年代から注目された貝塚で(註1)、現在までに小発掘が数回行なわれたと聞かすが、いまだ詳細な報告を知らない。遺物は加曾利B・安行I・II・III a・III b・III c式とハマグリ・アサリ・ツメタガイ・アカガイ・シオフキ・オオノガイ・キサゴ・ウミナ・イボニシ・カキが知られ(註2)、貝層形成の時期は後期にあると察せられるが、最近の報告では加曾利E・称名寺式も出土するという(註3)。鹿島は小糸川の支流笹塚川の上流左岸にある半島状台地の東斜面に所在する点在貝塚で、標高10m余の微高地である。堀之内・加曾利B式を出土する(註4)。

註1 吉田文俊「石器時代遺物発見地名表」(『人類学雑誌』19-217)明治37年

註2 伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年・千葉県文化財保護協会



第6図 三直貝塚周辺の地形

袖ヶ浦市南半部

貝塚・貝ブロックを含む遺跡一覧表

No.	市町 村別	県埋文分布 地図 No	貝塚・貝 ブロックを 含む遺跡	所在地	早期	前期	後期	晩期	上器の型式
279	3	57-108	ミツ作	ミツ作字東	■				茅山上層
280	4	57-403	大宮台	ミツ作字大宮台					縄文
281	5	51-406	下野田	野田字下野田					縄文
282	6	50-78	山野	飯富字山野			■		堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曾利B・ 曾谷・安行Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・ 姥山Ⅱ・大洞

『千葉県 の貝塚』昭和58年

註3 山本哲也『君津地方出土の土偶』（君津郡市文化財センター『研究紀要』Ⅲ）平成元年

註4 酒詰伸男『日本石器時代地名表』昭和34年・文化財保護委員会『全国遺跡地図千葉県』昭和42年

このほか川名川右岸の低地標高10m未満の所に山王貝塚があることは、昭和2年発行の千葉県君津郡教育会『千葉県君津郡々誌上巻』・昭和62年発行の千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』（3）等に記載されているが、その後君津郡市文化財センターの調査によって自然貝層であることが判明している。（前掲（註3）山本哲也論文中に記載）。

最後に千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年所載の本名輪遺跡は君津市の西北にある海食崖を刻む小谷の開口部に面する台地上に所在し、ハマグリ・サルボウ・アカニシ・押型文土器・加曾利EⅡ式を出土した貝ブロック遺跡で、貝層形成の時期は中期と思われる。

（千葉市文化財保護審議委員会会長）

（太線は貝層・貝ブロックの形成時期推定）

規模	備考	主 要 文 献
点 在		西村正衛「千葉県君津郡三ツ作貝塚発見の早期縄文式土器」（『古代』12号）昭和28年 桜井清彦・高橋竜三郎「千葉県掘之内貝塚・伊豆島貝塚・三ツ作貝塚の縄文式土器」（『史観』109冊）昭和58年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』（3）昭和62年
		伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』（3）昭和62年
馬 踏 形 （半円形）	一部発掘	房総考古資料刊行会『袖ヶ浦町山野貝塚』昭和48年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年

No. 通しNo.	市町村別	県埋文分布 地 図 No.	貝類・貝 ブロックを 含む遺跡	所 在 地	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	土 器 の 型 式
283	7	50,56-57	宮ノ越	下新田字宮ノ越				■		勝坂・阿玉台・加曾利E I ・II・III・IV・堀之内I・ II・加曾利BI・III・曾谷
284	8	50-387	西浜街道	飯富字西浜街道						縄文
285	9	50-404	台 中	神納字台中						縄文
286	10	50-405	大 野 台	神納字大野台						縄文
323	11		飯 富 (台)	飯富字台				■		加曾利E・堀之内・加曾利 B・安行I・II

木更津市

No. 通しNo.	市町村別	県埋文分布 地 図 No.	貝類・貝 ブロックを 含む遺跡	所 在 地	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	土 器 の 型 式
287	1	57-247	伊 豆 島	伊豆島字大清水				■		堀之内I・II・加曾利BI
288	2	56-419	砥 岡 (上深作)	砥岡字上深作	■		■	■		田戸上層・勝坂・阿玉台・ 加曾利E・称名寺・堀之内 I・II・加曾利B・安行I ・II・III
289	3	56-416	永 井 作	永井作字新田		■		■		諸磯・堀之内I・II・加曾 利BI・II
290	4	56-279	徳 蔵 寺	矢那字寺ノ台			■	■		加曾利E II・堀之内I・II ・加曾利B II
291	5	56-151	明 石 口	矢那字明石口			■			加曾利E
292	6		峯 の 台	矢那字峯の台			■	■		加曾利E II・III・堀之内I ・II・加曾利BI・II・III ・安行I

規 模	備 考	主 要 文 献
馬 蹄 形 保 存		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年 能城秀吾「袖ヶ浦町宮ノ越貝塚について」(千葉県文化財保護協会『千葉文 華』25号)平成2年
		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年
		同 上
		同 上
地 点		横山湾三郎「上総國小櫃川流域に於ける石器時代遺跡に就いて」(『史蹟名 勝天然記念物』6-1)昭和6年 酒詰伸男『日本貝塚地名表』昭和34年 伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 文化財保護委員会『全国遺跡地図千葉県』昭和42年

規 模	備 考	主 要 文 献
点 在	一部発掘 保存 標高86m	桜井清彦・高橋電三郎『千葉県堀之内貝塚・伊豆島貝塚・三ツ作貝塚の縄文 土器』(『史蹟』109冊)昭和58年 木更津市教育委員会『伊豆島・宮脇遺跡』平成2年
馬 蹄 形	一部発掘 消滅	東京帝国大学理学部人類学教室『日本石器時代遺物発見地名表』第5版、 昭和3年 横山湾三郎「上総國小櫃川流域に於ける石器時代遺跡に就いて」(『史蹟名 勝天然記念物』6-1)昭和6年 対島郁夫「千葉県木更津市紙園上深作貝塚」(日本考古学協会『日本考古学 年報9』)昭和36年 千葉県教育委員会『紙園貝塚発掘調査概報』昭和45年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年 山本哲也「君津地方出土の土偶」(君津都市文化財センター『研究紀要』Ⅲ) 平成元年
地 点	一部発掘 消滅 標高8m 砂丘上	東京帝国大学理学部人類学教室『日本石器時代遺物発見地名表』第4版、 大正6年 対島郁夫『木更津市永井作新田貝塚発掘略報』昭和32年 酒詰伸男『日本貝塚地名表』昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年
地 点		千葉県文化財保護協会『千葉の貝塚』昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年
貝 ブ ロ ッ ク		千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年
点 在	一部破壊	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年

No.		県埋文分布 地 図 №	貝層・貝 ブロックを 含む遺跡	所 在 地	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	土 器 の 型 式
通し№	市町 村別									
293	7	56-150	鎌 足 (墓の台 遺 跡)	矢那字金谷						加曾利E・堀之内・加曾利B
294	8	56-82	覆ヶ作 (大久保)	大久保字覆ヶ作						称名寺・堀之内I・II・加 曾利BII
295	9	56-421	下 辻	大久保字下辻						縄文
296	10		江 沢	江沢						加曾利E・堀之内・加曾利 B・安行I

君 津 市

No.		県埋文分布 地 図 №	貝層・貝 ブロックを 含む遺跡	所 在 地	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	土 器 の 型 式
通し№	市町 村別									
297	1	62-60	三 直	三直字新関						加曾利E・称名寺・加曾利 B・安行I・II・IIIa・ IIIb・IIIc
324	2	56-6	本名輪 (本名輪東)	坂田字本名輪						押型文・加曾利EII

富 津 市 北 半 部

No.		県埋文分布 地 図 №	貝層・貝 ブロックを 含む遺跡	所 在 地	早 期	前 期	中 期	後 期	晩 期	土 器 の 型 式
通し№	市町 村別									
298	1	61-66	鹿 島 (飯野) (上飯野 ・吹出)	上飯野字鹿島・吹 出						堀之内・加曾利B

規模	備考	主 要 文 献
地 点		伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年
点 在	一部破壊	千葉県君津郡教育会『千葉県君津郡々誌・上巻』昭和2年 田村健三『波岡村誌』昭和18年 酒誌伸男『日本貝塚地名表』昭和34年 木更津市『木更津市史』昭和47年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年
地 点	一部破壊	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年
地 点	消 滅	伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 文化財保護委員会『全国遺跡地図千葉県』昭和42年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年

規模	備考	主 要 文 献
点 在	標高90 m 一部破壊	吉田文俊『石器時代遺物発見地名表』（『人類学雑誌』19-217）明治37年 伊藤和夫・金子浩昌『千葉県石器時代遺跡地名表』昭和34年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年 千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図』(3)昭和62年 山本哲也『君津地方出土の土偶』（君津都市文化財センター『研究紀要』Ⅲ）平成元年
貝ブロック	殆んど消滅	千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年

規模	備考	主 要 文 献
点 在	標高10 m 半壊	吉田文俊『石器時代遺物発見地名表』（『人類学雑誌』19-217）明治37年 東京帝国大学理学部人類学教室『日本石器時代遺物発見地名表』第5版、昭和3年 酒誌伸男『日本石器時代地名表』昭和34年 文化財保護委員会『全国遺跡地図千葉県』昭和42年 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚』昭和58年